

# 『詩人主客圖』の制作背景について

秋谷幸治

## Ⅰ、はじめに

晩唐には、科擧受験の手引き書として、さまざまな詩論書や、句圖と呼ばれる摘句集が多く編まれた。本論は張爲の編による『詩人主客圖』というユニークな句圖について論じたい。

『詩人主客圖』は中晩唐の八十四人の摘句を集めた句圖である。この句圖の最大の特徴は、摘句を収録するだけでなく、各詩人を六つの流派に分け、五つの層に序列化しているところにある。ここから『詩人主客圖』は、中國文學批評史において注目を浴びてきた。しかし流派の分け方、序列の仕方、摘句の選出のあり方などについては、後世の人々から、厳しい批判を受けてきた。本論では、張爲がいかなる背景のもとに『詩人主客圖』を制作をしたのか、さらには批判されながらも讀まれ續けた理由は何であったのかを検討したい。

## Ⅱ、『詩人主客圖』とは

### ①『詩人主客圖』の構成

まずここでは、『唐詩紀事』卷六十五収録の『詩人主客圖』の序の原文を挙げてみよう。<sup>1)</sup>各流派の別を段落に分けて記すと次のようになる。

①若主人門下處其客者、以法度一則也。

①以白居易爲廣大教化主。上入室、楊乘。入室、張祜、羊士諤、元稹。升堂、盧仝、顧況、沉亞之。及門、費冠卿、皇甫松、殷堯藩、施肩吾、周元範、祝元膺、徐凝、朱可名、陳標、童翰卿。

②以孟雲卿爲高古奧逸主。上入室、韋應物。入室、李賀、杜牧、李餘、劉猛、李涉、胡幽貞。升堂、李觀、賈馳、李宣古、曹鄴、劉駕、孟遲。及門、陳潤、韋楚老。

③以李益爲清奇雅正主。上入室、蘇郁。入室、劉畋、僧清塞、盧休、于鵠、楊洵美、張籍、楊巨源、楊敬之、僧無可、姚合。升堂、方干、馬戴、任蕃、賈島、厲玄、項斯、薛壽。及門、僧良乂、潘咸、于武陵、詹雄、衛準、僧志定、喻冕、朱慶餘。

④以孟郊爲清奇僻苦主。上入室、陳陶、周朴。及門、劉得仁、李溟。

⑤以鮑溶爲博容宏拔主。上入室、李群玉。入室、司馬退之、張爲。

⑥以武元衡爲瑰奇美麗主。上入室、劉禹錫、入室、趙嘏、長孫佐輔、曹唐。升堂、盧頻、陳羽、許渾、張蕭遠。及門、張陵、章孝標、雍陶、周祚、袁不約。

中晚唐の八十四人の詩人が「廣大教化」「高古奧逸」「清奇雅正」「清奇僻苦」「博容宏拔」「瑰奇美麗」という六つの流

派に分類され、「主」「上入室」「入室」「升堂」「及門」の五つの層に序列化されている。周知の通り、「入室」や「升堂」というのは、「由や堂に升れり、未だ室に入らざるなり（由也升堂矣、未入於室也）」（『論語』先進篇）というように孔子が弟子たちを評した際に用いた言葉であり、その後、「如し孔氏の門賦を用ひるや、則ち賈誼は室に升り、相如は室に入る（如孔氏之門用賦也、則賈誼升堂、相如入室矣）」（『法言』吾子篇）等のように文藝批評においても用いられるようになった。<sup>2)</sup> すなわち『詩人主客圖』は、孔子と弟子との関係に見立てて、各流派の詩人たちを序列化しているのである。

## ② 『詩人主客圖』に對する評價

『詩人主客圖』は、非常にユニークな句圖であるが、その内容については厳しい批判を受けてきた。例えば南宋の陳振孫は「要皆な未だ然らざる者有り（要皆有未然者）」（『直齋書錄解題』卷二二）と述べ、要領を得ていないと指摘する。明の胡震亨は「妄りに流派を分かち、謬僻尤も甚だし（妄分流派、謬僻尤甚）」（『唐音癸籤』卷三十二）と述べ、流派の分け方が適切ではないと指摘する。明の胡應麟は「張爲の主客圖は、義例は迂僻、良に噴飯に堪へたり（張爲主客圖、義例迂僻、良堪噴飯）」（『詩藪』外篇卷三）と述べ、清の李調元も「即ち引く所の諸人の詩は、亦た其の集中の傑出なる者に非ず（即所引諸人之詩、亦非其集中之傑出者）」（『函海』所收、李元調『詩人主客圖』序）と述べ、摘句の選出が妥當ではないと指摘する。<sup>3)</sup>

このように『詩人主客圖』は、後世の人々によって様々な角度から厳しく批判され続けてきた。あまりに理解し難い内容であったからか、清の李懷民は『詩人主客圖』を改編して、張籍を「清真雅正」の「主」に、賈島を「清真僻苦」の「主」にすえ、『重訂中晚唐詩主客圖』を制作している。<sup>4)</sup>

\*

では試みに今日的な目から見て、『詩人主客圖』における理解し難い部分を具體的に擧げてみよう。

第一には、今日の文學史の常識から見ると、重要な詩人よりも無名な詩人が上層に位置している例が散見する。例えば「廣大教化」では、白居易と并稱される元稹（入室）よりも、楊乘（上入室）が上層に位置している。「高古奥逸」では、中晩唐の代表詩人と目される韋應物（上入室）、李賀（入室）、杜牧（入室）よりも、孟雲卿（主）が上層に位置している。「清奇雅正」では、張籍（入室）、賈島（入室）よりも、蘇郁（上入室）が上層に位置している。

第二には、流派の分け方が不可解である。例えば、隱逸や脫俗的氣分を意味する「高古奥逸」のグループに、墓場や幽靈を題材とした詩を多く作つた李賀や、詠史詩や艶詩で知られる杜牧が分類されている。

第三には、繼承關係を考慮せずに詩人を序列化している。例えば、「廣大教化」では白居易が「主」に、顧況がその下層の「入室」に位置している。しかし事實關係を見ると、上京してきた青年時代の白居易を見出したのが顧況である。系圖は繼承關係に基づいて編まれるもの、という今日的な常識から見ると、顧況が白居易の下層に位置していることは理解し難い。

\*

『詩人主客圖』は後世の人々から見ると、理解に苦しむ系圖である。むろん張爲に確固とした考えがあつて、『詩人主客圖』を制作したのであるが、それを追跡することは容易なことではない。というのも張爲に關する資料がわずかしか残つておらず、そもそも『詩人主客圖』が完全な形では残っていないのである。現存する『詩人主客圖』の最も古いテキストは南宋の初頭に刊行された『唐詩紀事』に収録されたものだが、全八十四人中、十二人の摘句が脱落している。加えて序においても「入室」「升堂」「入門」が無いグループがあり、ここにも脱落の痕跡が認められる。したがって、

現存する『詩人主客圖』をもとに張爲の詩觀を完全に理解するのは、不可能だと言うべきだろう。

一方で『詩人主客圖』の収録詩人や編者の張爲の社會階層を追跡することによって、制作背景については概ね把握することができると思われる。次節では、まず収録詩人について調査を試みよう。

### Ⅲ、収録詩人の調査

本節では『詩人主客圖』に収録された八十四人の詩人の、科擧及第年と官歴とをまとめてみた<sup>(7)</sup>。次頁以降にまとめた表の見方について説明しよう。

「及第年」には『登科考記』をもとに、禮部の進士科及第年を記す。なお明經科及第の場合は「\*」をつける。『登科考記』に名が記されていない場合は、科擧落第もしくは不受験と見なして「×」をつける。吏部と制科についての情報は記さない。

「官歴」には『舊唐書』『新唐書』『唐詩紀事』『唐才子傳』をもとに、致仕を記す。致仕が分からない場合は、その詩人が就いた最も品階の高い官名を擧げる。仕官の跡が認められない場合は不明と記す。

摘句が脱落している詩人には波線をつける。摘句については、特に散佚、誤寫などが多く、相當に混亂しているので、本論ではひとまず検討しない<sup>(8)</sup>。

『詩人主客圖』に收められている計八十四名の詩人を調査してみると、科擧落第者・不受験者や官歴不明者が非常に多いことが分かる。そしてその中に詩僧や妓女といった、晩唐になって新たに詩作に加わった階層も認められる。次頁以降の表では、官歴不明者の番號を白抜き文字で表した。

①廣大教化（品第の高い官吏グループ）

まず「廣大教化」のグループを見てみよう。「廣大教化」の「主」に位置する白居易について、晩唐の吳融は「白樂天の諷諫五十篇も、亦た一時の奇逸極言なり。昔張爲は詩圖五層を作り、白氏を以て廣徳大教化の主と爲すは、錯ならず（白樂天諷諫五十篇、亦一時之奇逸極言。昔張爲作詩圖五層、以白氏爲廣徳大教化主、不錯矣）」（『禪月集序』）と述べ、「諷諫」という點に注目して捉えている。これに對して明の王世貞は「張爲は白樂天を廣大教化の主と稱す。用語は流便にして、事をして平妥ならしむるは、固より其の長ずる所なり（張爲稱白樂天廣大教化主。用語流便、使事平妥、固其所長）」（『藝苑卮言』卷四）と述べ、「平易な表現」という點に着目して捉えている<sup>9</sup>。兩者の記述に基づく「廣大教化」とは廣大な讀者を獲得した諷刺教化に役立つ詩派ということになるうか。

なお各流派の名稱は、美學範疇語として重要であるが、本論においては簡單にその意味を捉えるのみにして、深くは立ち入らない。先に述べたように、収録詩人の科擧及第や官歴のあり方から『詩人主客圖』の特徴を明かにしたい。それでは「廣大教化」に収録されている詩人たちの顔ぶれを見てみよう。

|            |              |           |    |      |            |    |     |        |  |
|------------|--------------|-----------|----|------|------------|----|-----|--------|--|
| 7          | 5            | 3         | 1  |      |            |    |     |        |  |
| 顧況         | 元稹           | 張祜        | 入室 | 主    | 白居易        | 詩人 | 及第年 | 官歴（品階） |  |
| 至徳2        | 貞元9*         | ×         | ×  | 貞元16 | 刑部尙書（正3）   |    |     |        |  |
| 著作佐郎（從6上）  | 同中書門下平章司（正3） | 不明        |    |      |            |    |     |        |  |
| 8          | 6            | 4         | 2  |      |            |    |     |        |  |
| 沉亞之        | 盧仝           | 羊士諤       | 升堂 | 上入室  | 楊乘         | 詩人 | 及第年 | 官歴（品階） |  |
| 元和10       | ×            | 貞元元       | ×  | 大中元  | 殿中侍御史（從7上） |    |     |        |  |
| 殿中侍御史（從7上） | 不明           | 戸部郎中（從5上） |    |      |            |    |     |        |  |



を以て、偏へに田園に放にす（以康樂之奧博、多溺於山水。以淵明之高古、偏放於田園）（『與元九書』）という表現を基にして考えると、謝靈運の山水詩や陶淵明の田園詩のような、脱俗的な詩を指すと思われる。「高古」について『詩學大辭典』は「氣高く、古ぶりで俗氣のない風格（指高遠古雅不涉俗韻的風格）」と説明している<sup>10</sup>。それでは「高古奥逸」に収録されている詩人たちの顔ぶれを見てみよう。

|                          |           |           |                  |           |                       |           |          |        |  |
|--------------------------|-----------|-----------|------------------|-----------|-----------------------|-----------|----------|--------|--|
| 33                       | 31        | 29        | 27               | 25        | 23                    | 21        | 19       |        |  |
| 及門                       |           |           | 升堂               |           |                       | 入室        | 主        |        |  |
| 陳潤                       | 劉駕        | 李宣古       | 李觀 <sup>11</sup> | 李涉        | 李餘                    | 李賀        | 孟雲卿      | 詩人     |  |
| 大曆5*                     | 大中3       | 會昌3       | 貞元8              | ×         | 長慶3                   | ×         | 永泰初      | 及第年    |  |
| 鄜城令（正6上以下） <sup>13</sup> | 國子博士（正5上） | 不明        | 太子校書郎（正9上）       | 通事舍人（從6上） | 湖南觀察使從事 <sup>12</sup> | 奉禮郎（從9上）  | 校書郎（正9上） | 官歷（品階） |  |
| 34                       | 32        | 30        | 28               | 26        | 24                    | 22        | 20       |        |  |
|                          |           |           |                  |           |                       |           | 上入室      |        |  |
| 韋楚老                      | 孟遲        | 曹鄴        | 賈馳               | 胡幽正       | 劉猛                    | 杜牧        | 韋應物      | 詩人     |  |
| 長慶4                      | 會昌5       | 大中進士      | 大和9              | ×         | ×                     | 大和2       | ×        | 及第年    |  |
| 拾遺（從8上）                  | 浙西觀察使掌書記  | 太常博士（從7上） | 不明               | 不明        | 不明                    | 中書舍人（正5上） | 蘇州刺史（從3） | 官歷（品階） |  |

全十六名中に、五品以上の詩人が三人であるのに對して、六品以下は九人おり、品階の低い官吏の含有率が高いグループと言える。全體として「廣大教化」よりも少し時代が下り、長慶、大和、會昌年間に活躍した詩人が目立つ。

「主」に位置する孟雲卿は、苦學のすえ四十歳前後で進士科に及第後、校書郎に就いたが、官途は順調にいかず、南海・荊州・廣陵を流浪した詩人である。杜甫や元結とも交流があり、特に五言古詩に評價が高く「當今古調、其の右に出づるもの無し、一時の英なり（當今古調、無出其右、一時之英也）」（『中興閒氣集』）と稱えられている<sup>14</sup>。

### ③ 清奇雅正（多様な階層の詩人を擁するグループ）

續いて「清奇雅正」のグループを見てみよう。このグループには最も多くの詩人が収録されており、その中には多様な階層の詩人が確認できる。「清奇」について『詩學大辭典』は「清らかで澄み渡り、平俗とは異なる藝術のあり方（清明澄澹、不同平俗的藝術境界）」と説明している。「雅正」とは高尚で正統である様を指し、「清奇」とともに「平俗」と相對する術語である。それでは「清奇雅正」に収録されている詩人たちの顔ぶれを見てみよう。

|          |           |           |    |     |          |        |  |  |  |
|----------|-----------|-----------|----|-----|----------|--------|--|--|--|
| 45       | 43        | 41        | 39 | 37  | 35       |        |  |  |  |
|          |           |           |    | 入室  | 主        |        |  |  |  |
| 僧無可      | 楊巨源       | 楊洵美       | 盧休 | 劉畋  | 李益       | 詩人     |  |  |  |
| ×        | 貞元5       | 實歴元       | ×  | ×   | 大曆4      | 及第年    |  |  |  |
| 不明       | 國子司業（從4下） | 監察御史（正8上） | 不明 | 不明  | 禮部尙書（正3） | 官歴（品階） |  |  |  |
| 46       | 44        | 42        | 40 | 38  | 36       |        |  |  |  |
|          |           |           |    |     | 上入室      |        |  |  |  |
| 姚合       | 楊敬之       | 張籍        | 于鵠 | 僧清塞 | 蘇郁       | 詩人     |  |  |  |
| 元和11     | 元和2       | 貞元15      | ×  | ×   | ×        | 及第年    |  |  |  |
| 祕書監（正4上） | 國子祭酒（從3）  | 國子司業（從4下） | 不明 | 不明  | 蘇州刺史（從3） | 官歴（品階） |  |  |  |

|            |           |           |           |                  |             |           |           |
|------------|-----------|-----------|-----------|------------------|-------------|-----------|-----------|
| 61         | <b>59</b> | <b>57</b> | <b>55</b> | <b>53</b>        | 51          | <b>49</b> | <b>47</b> |
|            |           |           |           |                  |             |           | 升堂        |
| 朱慶餘        | 僧志定       | 詹雄        | 潘誠        | 薛壽 <sup>15</sup> | 厲元          | 任蕃        | 方干        |
| 實歴? 2      | ×         | ×         | ×         | ×                | 大和2         | ×         | 大中年間      |
| 校書郎(正9上)   | 不明        | 不明        | 不明        | 不明               | 監察御史(正8上)   | 不明        | 不明        |
|            | 60        | <b>58</b> | <b>56</b> | <b>54</b>        | 52          | 50        | 48        |
|            |           |           |           | 及門               |             |           |           |
| 喻覺         | 衛准        | 于武陵       | 僧良又       | 項斯               | 賈島          | 馬戴        |           |
| 開成5        | 大歴5       | ×         | ×         | 會昌4              | ×           | 會昌4       |           |
| 烏程令(正6上以下) | 不明        | 不明        | 不明        | 丹徒縣尉(從9上以下)      | 長江主簿(正9上以下) | 太學博士(正6上) |           |

全三十七人の中で、五品以上の詩人が六人いる一方で、官歴不明者が十四人もおり、その中には詩僧(四人)と妓女(一人)も収められている。なお「升堂」の方干は、張爲と親交があった詩人で、貫休の詩において両者が并稱されている。これについては次節で確認しよう。

「主」に位置する李益は、元和年間に文名を馳せた詩人で、禮部尙書を以て致仕した高級官僚である。特に「曉角を聴く」詩、「夜に受降城に上り笛を聞く」詩、「從軍北征」詩といった邊塞詩を世に残し、自身も「文を爲るに軍旅の思多し(爲文多軍旅思)」「(從軍詩序)」と詠っている。後世においては、「七言絶は開元以下、便ち當に李益を以て第一と爲すべし(七言絶開元以下、便當以李益爲第一)」「(『詩藪』内編卷六、近體下、絶句)」というように七言絶句が高く評價された。<sup>16)</sup>

④清奇僻苦（科擧落第者グループ）（一）

續いて「清奇僻苦」のグループを見てみよう。このグループは、収録された詩人の数が少なく、「主」の孟郊以外はみな科擧落第者・官歴不明者である。その孟郊も高齡で進士に及第し地方の微官しか得られなかった下層士大夫である。「僻苦」について、「僻」とは通常ではないさま、かたよったさまを指し、「苦」とは窮屈なさまを指す。「僻苦」とは「雅正」と眞逆の意味の術語である。「清奇僻苦」に収録されている詩人たちの顔ぶれを見てみよう。

|    |     |      |     |            |  |  |  |
|----|-----|------|-----|------------|--|--|--|
| 67 | 64  | 62   |     |            |  |  |  |
|    |     | 主    | 詩人  |            |  |  |  |
| 李溟 | 周朴  | 孟郊   | 及第年 | 官歴（品階）     |  |  |  |
| ×  | ×   | 貞元12 |     | 溧陽尉（從9上以下） |  |  |  |
| 不明 | 不明  |      |     |            |  |  |  |
|    | 65  | 63   |     |            |  |  |  |
|    | 及門  | 上入室  | 詩人  |            |  |  |  |
|    | 劉得仁 | 陳陶   | 及第年 | 官歴（品階）     |  |  |  |
|    | ×   | ×    |     | 不明         |  |  |  |
|    | 不明  |      |     |            |  |  |  |

「入室」と「升堂」がないが、もともとなかったのか散佚してしまったのかは分からない。科擧及第者は「主」の孟郊のたった一人で、五品以上の官位まで進んだ詩人は一人もいない。なお「上入室」の周朴も、張爲と親交があった詩人で、張爲は「周朴と名を齊しくす（與周朴齊名）」（『唐詩紀事』卷六十五）と評された。

「主」の孟郊は韓愈と交流があった苦吟派詩人であり、賈島とともに「郊寒島瘦」と并稱された。四十五歳で科擧に及第したものの、溧陽尉という地方の微官しか得られず、この職もすぐに棄て各地を放浪したという。「主」である孟郊ですらこの有り様である。「清奇僻苦」は政治的不遇者を集めたグループと見て間違いなからう。



|            |           |     |           |      |            |              |        |
|------------|-----------|-----|-----------|------|------------|--------------|--------|
| 83         | 81        | 79  | 77        | 75   | 73         | 71           |        |
|            |           |     |           |      | 入室         | 主            |        |
| 周祚         | 章孝標       | 張蕭遠 | 陳羽        | 曹庚   | 趙嘏         | 武元衡          | 詩人     |
| 唐末進士       | 元和14      | 元和8 | ×         | ×    | 會昌4        | 建中4          | 及第年    |
| 不明         | 校書郎(正9上)  | 不明  | 太子文學(正6下) | 使府從事 | 渭南尉(從9上以下) | 同中書門下平章司(正3) | 官歴(品階) |
| 84         | 82        | 80  | 78        | 76   | 74         | 72           |        |
|            |           |     |           |      |            | 上入室          |        |
| 袁不約        | 雍陶        | 張陵  | 許渾        | 盧蘋   | 長孫佐輔       | 劉禹錫          | 詩人     |
| 長慶3        | 大和8       | ×   | 大和6       | ×    | ×          | 貞元9          | 及第年    |
| 職方員外郎(從6上) | 國士博士(正5上) | 不明  | 監察御史(正8上) | 不明   | 不明         | 禮部尙書(正3)     | 官歴(品階) |

全十四人中に、五品以上の詩人は三人、六品以下の詩人は六人、官歴不明者は五人収録されている。「主」の武元衡は、元和二年に同中書門下平章司(宰相)にまで登った中央官僚である。詩作も「元衡は五言詩に工みにして、好事の者は之を傳ふるに、往往にして管弦を破る(元衡工五言詩、好事者傳之、往往被于管弦)」「舊唐書」武元衡傳」というようにに人氣が高かった。

### ⑦六つの流派のまとめ

それでは、六つの流派における「科擧落第者・不受験者」「五品以上の官位者」「官歴不明者」「詩僧・妓女」の比率をまとめてみよう。

|        |             |             |              |             |             |             |              |
|--------|-------------|-------------|--------------|-------------|-------------|-------------|--------------|
|        | 廣大教化        | 高古奥逸        | 清奇雅正         | 清奇僻苦        | 博容宏拔        | 瑰奇美麗        | 全體           |
| 落第／不受験 | 7人<br>(39%) | 5人<br>(31%) | 14人<br>(52%) | 4人<br>(80%) | 2人<br>(50%) | 5人<br>(36%) | 37人<br>(44%) |
| 五品以上   | 4人<br>(22%) | 3人<br>(19%) | 6人<br>(22%)  | 0人<br>(0%)  | 0人<br>(0%)  | 3人<br>(21%) | 15人<br>(18%) |
| 官歴不明者  | 9人<br>(50%) | 4人<br>(25%) | 14人<br>(52%) | 4人<br>(80%) | 3人<br>(75%) | 5人<br>(36%) | 39人<br>(46%) |
| 詩僧／妓女  | 0人<br>(0%)  | 0人<br>(0%)  | 5人<br>(18%)  | 0人<br>(0%)  | 0人<br>(0%)  | 0人<br>(0%)  | 5人<br>(6%)   |

\*少数は四捨五入した。

右の表をごらんいただきたい。第一に、どのグループも科擧落第者・不受験者や官歴不明者を多く収録しており、全體を見るとそれぞれ四割を大きく越えている。むしろ官歴不明者については、現存する資料からは出仕の跡が認められないということであるから、実際には何らかの官に就いていた可能性がある。しかしそうであったとしても、記録に残らない程度の微官であったと考えられ、政治的影響力が無かったことには變わりはなからう。詩人Ⅱ政治家であった中國古典詩の世界において、この結果はとりわけ注目すべきである。

第二に、官位の高低を考慮せずに序列している。例えば「高古奥逸」では、孟雲卿（正九品上・校書郎）が「主」であるのに對して、韋應物（從三品・蘇州刺史）が「上入室」に位置している。また「清奇雅正」では、官歴不明者である劉敞・盧休・于鵠や詩僧の清塞が、高級官僚である張籍（從四品下・國子司業）や、楊巨源、楊敬之（從三品・國子祭酒）と同列の「入室」に並んでいる。

第三に詩僧、妓女を収録している。こうした社會階層は、中晚唐になって新たに詩作に加わった人々であり、「清奇雅正」にまとまって収録されている。ここには晚唐における詩の大衆化の流れが見て取れよう。<sup>17)</sup>なお、張爲も詩僧と深

い交流があったらしく、「句圖」も詩僧によって廣まったものとおぼしい。<sup>(18)</sup>この点については、次節で詳しく見ていき  
たい。

以上のように、詩僧や妓女をも含んだ科擧落第者や不受験者、官歴不明者を高い割合で収録し、彼らの詩作の價値を  
見出して系譜化したのが『詩人主客圖』の際立った特徴と言える。それでは張爲は、一體どのような詩人であり、どの  
ような背景のもとでこのような『詩人主客圖』を編んだのだろうか。これらを次節で確認しよう。

#### IV、張爲について

本節では、現存する資料から張爲の人物像を探ってみたい。正史に傳はなく、生卒年や官歴について詳細は分からな  
い。杜光庭「毛仙翁傳」の「大中戊寅の歲、進士の張爲は長沙に薄遊し、落魄すること數載、詩酒を以て自得し、隨計  
(科擧のこと)に汲汲とせず(大中戊寅歲、進士張爲薄遊長沙、落魄數載、以詩酒自得、不汲汲於隨計)<sup>(19)</sup>」という記述に  
基づくと、張爲が大中十二年に生存していたこと、進士には及第したが、<sup>(20)</sup>出仕に背を向けて詩や酒に溺れた人生を歩ん  
だことが分かる。出身地については「江南の詩人」(『唐詩紀事』卷六十五)とするものと「閩中の人」(『唐才子傳』卷  
十、張鼎の條)とするものがある。これについて傳璇琮氏は、『登科記考』卷二十七が「宜春志」を引き張爲を進士  
及第者に擧げていることを根據に「閩中の人」ではなく「宜春の人」であろうと指摘する。著作については、別集と張  
爲の手による『前輩題詠詩』という總集があったようだが、ともに散佚している。張爲の詩は『全唐詩』において四首  
(うち一首は摘句)しか現存していない。<sup>(21)</sup>

晩唐の高僧の貫休に、張爲について詠った詩が三首存在する。貫休は高級官僚とも深い交流があり、張爲やその詩作

仲間であった周朴、方干等は、貫休に頼って創作活動をしていたようである。<sup>(23)</sup> まず張爲と周朴について詠った詩を二首見てみよう。

張周二夫子、詩好人太癖

張周の二夫子は、詩は好きも人は太だ癖なり

更不過嶺來、如今頭盡白

更に嶺を過ぎて來たらず、如今、頭は盡く白し

……

我又聞二公、心與人不同

我又た聞く二公、心は人とは同じからず、

一生常在寂寞中、有時狂吟入僧宅

一生常に寂寞の中に在り、時有れば狂吟して僧宅に入る

(「懷張爲周朴」詩)

二子無消息、多應各自耕

二子消息無く、多まに應に各々自ら耕すべきなるのみ

巴江思杜甫、漳水憶劉楨

巴江には杜甫を思ひ、漳水には劉楨を憶ふ

(「懷周朴張爲」詩)

前者の詩からは、張爲と周朴とは一癖ある人物であり、ずっと嶺南地方(五嶺の南方)にこもって靜謐な生活をおくり、時折に寺院で詩作に興じていたことが分かる。『詩人主客圖』において詩僧を復數収録していたのは、張爲が僧宅を創作場とし、詩僧と深く交流していたことと大きな関係があるう。後者の詩では、田畑を自ら耕して生活している周朴と張爲の姿を想像し、彼らを杜甫と劉楨とに比して詠っている。

周朴については「閩中に寓し、僧寺の假の丈室に于いて以て居る。酒を飲まずして葦を茹で、塊然として獨り處る(寓于閩中、于僧寺假丈室以居。不飲酒茹葦、塊然獨處)」（『唐詩紀事』卷七一）というように寺院で僧侶のような暮らしをしていたことや、黃巢の亂の際に、出仕を求める黃巢に對して「我尙ほ天子に仕へず、安んぞ能く賊に従はん(我

尙不仕天子、安能從賊」(同上)と惡態をついて斬り殺された、というエピソードが残っている。續いて張爲と方干について詠った「懷方干張爲」詩を讀んでみよう。

螢沉荒塢霧、月苦綠梧蟬

螢は沉む荒塢の霧、月は苦ゆ綠梧の蟬

因憶垂綸者、滄浪何處邊

因りて憶ふ綸を垂るる者、滄浪の何處れの邊なるか

ここでは張爲と方干とを「綸(釣り糸)を垂るる者」と表現している。周知のように中國古典においては、漁師は隱者の象徴とされる。實際に、方干は進士には及第したが「一舉志を得ず、遂に會稽に遷れ、鑑湖に漁す(一舉不得志、遂遷于會稽、漁于鑑湖)」(『唐詩紀事』卷六三所引、孫邨「玄英先生傳」という人生を歩んだようである。辛臣の張文蔚と、中書舍人の封舜卿とは方干の死後、不遇を悼んで「名儒にて不遇なる者十有五人を奏して、請ひて一官を賜ひ、以て冥魂を慰む。干は其の一なり」(奏名儒不遇者十有五人、請賜一官、以慰冥魂。干其一也)、『唐詩紀事』卷六三)という。方干と並稱される張爲も恐らくほぼ同じような生涯を送ったであろうと想像される。それでは最後に張爲の「秋醉歌」詩の後半部を参考に、張爲の人物像を探ってみよう。登山の途次に大量の酒を飲み、夢の中で仙界に遊ぶ様子が次のように描かれている。

一夢到天曉、始覺一醉中

一たび夢みて天曉に到り、始めて一醉の中に覺む

皎然夢中路、直到瀛洲東

皎然として中路に夢み、直ちに瀛洲の東に到る

初平把我臂、相與騎白龍

初平は我が臂を把りて、相ひ與に白龍に騎り

三留對上帝、玉樓十二重

三たび留めて上帝に對す、玉樓十二重

上帝賜我酒、送我敲金鐘

上帝は我に酒を賜ひ、我を送りて金鐘を敲く

寶閣香斂苒、琪樹寒玲瓏

寶閣は香しく苒を斂め、琪樹は寒くして玲瓏たり

動葉如笙篁、音律相怡融

葉を動かすこと笙篁の如く、音律は相ひ怡融す

珍重此一醉、百骸出天地

此の一醉を珍重し、百骸天地より出づ

長如此夢魂、永謝名與利

長へに此の夢魂の如し、永へに名と利とに謝せん

夢で仙界に來た詩人は、仙人の初平と白龍に乗り、上帝に謁見して酒を賜つたという。そして末句では「此の一醉を珍重す」と詠い、「永へに名と利とに謝せん」と政治世界に背を向ける態度を表明している。詩中に描かれている詩人の姿をそのまま實像と見なすことは安直かも知れないが、現存する張爲に關する資料を總合すると、張爲は晩唐の混亂期に、政治社會に眞摯に向き合おうとはせず、閩地方の寺院においてひたすら詩作に興じた人物と見て間違いないだろう。してみると張爲が『詩人主客圖』において科擧落第者や官歴不明者を高い割合で収録していた理由も、自身と同じ境遇の下層士大夫たちを系圖化するためであつたと考えられる。すなわち、張爲が『詩人主客圖』を編んだ背景には、晩唐の混亂期に、政治的活躍をあきらめてしまつた自身を含む下層士大夫たちを、華やかな前代の詩人たちの系譜に連ねることによつて、足跡を残そうとする意圖があつたと思われるのである。

## V、まとめ

以上に見てきたように『詩人主客圖』は、政治的活躍ができなかつた下層士大夫をクローズアップした系圖である。こうした華やかさが全く無い系圖である『詩人主客圖』は、北宋以前に讀まれた形跡はほとんど認められない。わずかに張爲の後ろ盾だつたとおぼしい詩僧の貫休の別集である「禪月集」の序において、「昔張爲は詩圖五層を作り、白氏を以て廣徳大教化の主と爲すは、錯ならず（昔張爲作詩圖五層、以白氏爲廣徳大教化主、不錯矣）」という吳融による言

及が見られるのみである。

しかし南宋になると、にわかに『詩人主客圖』が注目を浴びるようになる。『詩人主客圖』が南宋に發掘され、注目されるようになった理由は、詩派の誕生と大いに關係があると思われる。すなわち近世になって市井の詩人が増え、江西詩派をはじめとする様々な詩派が形成される中で、『詩人主客圖』は「近世の詩派の說、殆ど此より出づ（近世詩派之說、殆出於此）」（『直齋書錄解題』卷二十二）というように、詩派のさきがけとみなされたのである。『詩人主客圖』は、後世の人々にとって全く理解に苦しむ系圖であつたため、嚴しい批判を受けてきた。しかし、最古の詩派の系圖である、という一點の價值のみによつて、他の句圖はほとんど散佚した中で散佚せずに讀まれ續けたと考えられるのである。

翻つて『詩人主客圖』を見ると、唐代において斬新な詩人の系圖であつたと言える。第一に孔子と弟子との關係に見立てて、「主」と「客」というように詩人を系譜化している點、第二に、その系圖に自身を含めている點である。これらは晩唐以前の文論には全く認められないものである。張爲は一體どのようにしてこのような系圖を思いついたのだろうか。詩僧と深い交流があつた張爲は、佛教の宗派圖などに觸發を受けた可能性もあるう。これらについては本論で検討できなかつた摘句の部分とあわせて、稿を改めて論じたい。

## 注

(一) 南宋・計有功撰、王仲鏞校箋『唐詩紀事校箋』（巴蜀書社、一九八九年）（二七五二頁）を參照。『詩人主客圖』は『困海』『談藝珠叢』『歷代詩話續編』等の叢書にも収録されている。

『詩人主客圖』について詳しく解説したものに、王運熙・楊明著『中國文學批評通史 隋唐五代卷』、第三章「詩句圖、『本事詩』和詩格」、第一節「張爲『詩人主客圖』」（上海古籍出版社、一九九六年）（七三四頁）、傅璇琮等主編『中國詩學大辭典』（浙江教育出版社、一九九九年）（二五五頁）があり、本論において資料を収集する際に參考にした。なお『詩人主客圖』の流傳のあ

- り方を論じたものに、拙論『詩人主客圖』の流傳に關する一考察』（『汲古』第七七號、二〇二〇年）がある。
- (2) 汪榮寶撰『法言義疏』（中華書局、二〇一三年）（四九頁）を參照。
- (3) 書誌情報は以下の通りである。宋・陳振孫撰『直齋書錄解題』（中國歷代書目叢刊）本、現代出版社、一九八七年版。明・胡震亨撰『唐音癸籤』（『四庫全書珍本三集』本、臺灣商務印書館、一九七一年版）。明・胡應麟撰『詩藪』（上海古籍出版社、一九七九年）。清・李調元輯『函海』第三函（宏業書局、一九六八年版）。
- (4) 清・李懷民輯評、張耕點校『重訂中晚唐詩主客圖』（中華書局、二〇一八年）を參照。
- (5) 上京し推薦を求めに來た白居易に對して顧況は「長安の百物貴し。居ること大だ易からず」と皮肉った。しかし顧況が「野火燒けども盡さず、春風吹きて又た生ず」の句を讀むと、「句の此くの如き有れば、天下に居るも、甚だ難きこと有らんや。老夫の前言は、之に戲れしのみ」と賞賛した、という。五代・王定保『唐摭言』（上海古籍出版社、一九七八年）（七六頁）を參照。
- (6) 前掲（1）注書『中國詩學大辭典』（浙江教育出版社、一九九九年）を參照。
- (7) 調査に用いた各書の書誌情報は以下の通りである。後晉・劉昫撰『舊唐書』（中華書局、一九七五年版）。宋・歐陽修、宋祁撰『新唐書』（中華書局、一九七五年版）。南宋・計有功撰、王仲鏞校箋『唐詩紀事校箋』（巴蜀書社、一九八九年）。元・辛文房撰、傅璇琮主編『唐才子傳校箋』（中華書局、一九九〇年）。清・徐松撰『登科記考』（中文出版社、一九八二年）。さらに以上の書に加えて、周祖譔主編『中國文學家大辭典』唐五代卷（中華書局、一九九二年）も參考にした。なお各職官の品階については、『舊唐書』職官志、『新唐書』百官志、小川環樹編『唐代の詩人その傳記』（大修館書店、一九七五年）に所收の唐代百官表によった。もちろん『詩人主客圖』の各流派のあり方を明らかにするには、摘句の分析は缺かせない。しかし各摘句の内容は共通點が全く見いだせなほどに雜然としている。例えば『廣大教化』の「主」として收録されている白居易の摘句は、「讀史」詩（諷諭詩）『與薛濤』詩（妓女に贈った艶詩）、題名不明の句（隱逸への憧れを詠ったもの）、というように内容がばらばらである。こうした統一性の無さが、後世の人々の批判的になったのだらう。また詩句も、現行本とかなり異なる部分があり、明らかな誤寫と見られる部分もある。本論は、收録詩人の科擧及第と官歴、張爲の生涯から、『詩人主客圖』の制作背景を明らかにすることを目的としている。摘句と流派名とがいかに関連しているかの検討については、改めて別稿を用意したい。
- (9) 書誌情報は以下の通りである。唐・貫休『禪月集』（『四部叢書刊初編』、上海書店、一九八九年版）。明・王世貞『藝苑卮言』（『歷代詩話續編』本、中華書局、一九八三年）。
- (10) 前掲（1）注書『中國詩學大辭典』（浙江教育出版社、一九九九年）を參照。

- (11) 李觀は同姓同名の人物がもう一人いる。もう一人の李觀は、李華の親族の子供で、科擧には及第しておらず、觀察御史(正8上)に就いた経歴がある。なお、論者は未見であるが、河内昭圖「二人の李觀」(『文藝論叢』五五、二〇〇〇年)という論文がある。
- (12) 「従事」(掌書記)は、外官の觀察使や節度使の屬官であるが、(7)注書の職官志、百官志、唐代百官表には品階の記載がない。縣令、縣主簿、縣尉などは、赴任地のランク(京・畿・上・中・中下・下)によつて品階が異なる。各赴任地のランクが判別のできない場合は、想定できる最も高い品階を擧げる。
- (13) 唐・高仲武『中興閒氣集』(『四部叢書刊初編』、上海書店、一九八九年版)を参照。
- (14) 薛壽について、『函海』本の『詩人主客圖』には「按唐無薛壽、疑是薛濤之訛」との割注がある。なお「廣大教化」の「主」の白居易には「薛濤に與ふ」詩の摘句が収録されている。恐らく、『函海』本が指摘する通り、薛壽は薛濤を指すと思われる。薛濤は、白居易・元稹・劉禹錫らと交流のあつた妓女であり、文名高く、女校書郎と呼ばれた。
- (15) 南宋・計有功撰、王仲鏞校箋『唐詩紀事校箋』(巴蜀書社、一九八九年)(八一頁)、明・胡應麟撰『詩數』(上海古籍出版社、一九七九年)(二二頁)を参照。
- (16) 佐藤保氏は、「中晚唐詩の特色の一つに、一群の僧侶詩人と、薛濤・魚玄機ら女流詩人の出現がある」と指摘し、こうした現象を「詩の作者層の擴がり」と、詩的世界の多樣化を示すもの」と捉えている(前野直彬編『中國文學史』東京大學出版社、一九九八年)(二〇九頁)。なお、科擧落第を繰り返した賈島が、一時期僧となり、無本と名乗っていたという逸話から推し量ると、寺院が科擧落第者の一つの受け皿であつた可能性があろうと思われる。
- (17) 張伯偉氏は、晚唐において詩僧が制作した「句圖」として、僧定雅『寡和圖』三卷、僧惟鳳『風雅拾翠圖』一卷、『九僧選句圖』一卷、僧惠崇『惠崇句圖』一卷を擧げている。張伯偉撰『全唐五代詩格彙考』詩格論(江蘇古籍出版社、二〇〇二年)(四八頁)を参照。
- (18) 前掲(1)注書『唐詩紀事校箋』(巴蜀書社、一九八九年)(二〇六九頁)を参照。
- (19) 『登科記考』卷二十七(二七六八頁)には、進士及第者として張爲を擧げているが、及第年は記されていない。
- (20) 前掲(7)注書『唐才子傳校箋』(中華書局、一九九〇年)(三一九頁)を参照。
- (21) 張爲の著書が五代から元代に至る目錄類にいかにか記されているのかは、前掲(1)注書の拙論(三二頁)を参照。
- (22) 會昌の廢佛以降、貫休や齊己といった詩僧たちは貴人や高級官僚と積極的に交流をし、彼らの援助を頼つて教團の維持に努めたという。王秀林著『晚唐五代詩僧群體研究』(中華書局、二〇〇八年)(二二四頁)を参照。

(24) 唐・貫休『禪月集』(『四部叢書刊初編』、上海書店、一九八九年版)を参照。

(25) 前掲(1) 注書『唐詩紀事校箋』(巴蜀書社、一九八九年)(二二八三頁)を参照。

(26) 『詩人主客圖』が北宋以前に讀まれた形跡がほとんど無く、南宋以後に注目を浴びるようになったこと、そしてその背景には江西詩派の影響があったことの詳細については前掲(1) 注書の拙論を参照。

(27) 前掲(1) 注書の『汲古』の編集後記にて金文京氏は、『詩人主客圖』について『升堂入室』は本來、孔子が弟子について言ったものだが、それを『客』に見立てているところが妙である(「六二頁」と指摘されている。金氏が指摘されるように、師と弟子という關係を、敢えて主人と客人との關係に捉え直した上で詩人を系譜化している點は、重要な特徴である。